

目的・目標

- 両校で合同授業ができる単元を計画・実施し、インクルーシブな学校運営の推進体制を構築する。
- 両校の教職員が互いの学校の教育課程や在籍する生徒の特性などの理解を深める。
- 様々な調整において、両校の学校教育目標が達成される推進体制、推進方法を明らかにする。

学校運営連携校

名古屋市立若宮高等特別支援学校(対象:知的障害)
名古屋市立若宮商業高等学校

一体型

カリキュラム・マネージャー

元中学校教頭・元特別支援学校教頭、現高等学校非常勤教諭

取組概要

○ 美術、体育における合同授業の実施

- ・ 特別支援学校と商業高校の1年同士で、美術は「カードゲーム」、体育は男子が「卓球」、女子が「バドミントン」「バスケットボール」に分かれて、合同で授業を行った。
- ・ 授業は、特別支援学校、商業高校の教員がそれぞれメインティーチャーとサブティーチャーを順番に務めた。
- ・ 授業の内容は、両校の教員とカリキュラム・マネージャーとが連携し、準備・検討した。

○ その他の教科における合同の取り組み

- ・ 特別支援学校1年の総合的な探究の時間と商業高校2年の理科(生物基礎)の教育課程を関連させ、「池、河川などを取り巻く自然環境のもと、人間の商業活動と生物の共生を考える」ことをテーマに合同授業を行った。
- ・ 商業高校3年の課題研究「商品開発と流通」「株と投資」では、従来から文化祭などの機会を利用して開発した商品の販売実習を行っていたが、今年度は販売活動に特別支援学校の生徒が参加し、合同で実習を行った。
- ・ 商業高校3年の課題研究「デジタルマーケティング」では、特別支援学校1年が作成した学校紹介動画を題材にして、改善点を挙げて助言することで、作品の完成度を上げる取り組みを行った。

○ 両校の生徒が主体的に関わりながら作り上げる学校行事の実施

- ・ 体育祭、文化祭では、商業生徒会が中心となって、活動内容や役割分担を決め、取り組んだ。
- ・ 協力して司会進行を務めたり、
- ・ 特別支援学校の開校記念式典を兼ねた「チーム若宮サポーターズフェスタ」では、本市教育委員会が特別支援学校との連携をするために協定書を交わした6社が、両校の生徒の前で、「企業のDE&Iと今後の共生社会に求められる人財像」について、自社の取り組みを紹介し、両校の校長を交えてパネルディスカッションを行った。両校の生徒にとってなじみのあるスーパーマーケットやドラッグストア、ファーストフードなどそれぞれの理念に基づいた取り組みを目の当たりにして、見識を広げることができた。



【連携企業と校長によるパネルディスカッション】

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・ 美術・保健体育等において、共に学ぶことにより、学習効果の拡大・向上を図る。
- ・ 職業専門コースと商業科の教育課程の関連づけを図り、実践的で社会に開かれた教育の推進を図る。

指導内容・指導方法の工夫

- ・ 両校の教員がそれぞれTIを務める授業を行い、両校の生徒を指導する機会をもつことで、それぞれが主体的に指導内容・指導方法を考える。
- ・ 題材をゲーム化することにより、両校の生徒が取り組みやすい動機づけ、就労場面での活用をできるイメージをもたせる。
- ・ グループ分けでは、各校の生徒が単独にならないようにして、安心できるようにする。

交流及び共同学習の成果

- ・ 生徒に伝わりやすいユニバーサルデザイン化された授業づくりの視点をもって授業を計画・実施することができた。
- ・ 相手のよさや努力した部分に気付くことができた。
- ・ 考え方が違ったり、自分たちとは違うひらめきをもっていることに気付く生徒もおり、学習を深めることができた。



②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

- ・ 授業の計画、実施、評価へのカリキュラムマネージャーが参画し、目標の設定や課題の確認、支援の在り方について、整理するようにした。特別支援学校の開校に際し、様々な運営方法の再検討が迫られる中、常に交流及び共同学習の実施を念頭に置いた検討を進めることができた。
- ・ 授業の実施にあたっては、両校の教科担当が中心指導者を務める形で実施した。授業の必要に応じて特別支援学校の教員が小グループなどの補助指導者を務めた。両校の生徒の実態を知る教員が同時に授業に参画することで、生徒・指導者ともに安心感をもって授業に臨むことができた。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

- ・ 文化祭やチーム若宮サポーターズフェスタ(特支開校記念式典)において、商業高校の商業科課題研究「商品開発と流通」、「株と投資」の授業で研究を進めてきた商品の製造及び販売活動を実施した。特別支援学校の職業科の学習に関連して、販売活動の補助を務めた。商品開発・製造を商業高校教員が計画・実施し、販売活動を進めるにあたり必要な支援や配慮を特別支援学校教員が実施した。それぞれ単独校での実施ではできない活動の広がりや配慮の行き届いたきめ細かな実施ができた。

各学校運営連携校における校内体制の構築

- ・ 商業高校3年生における普通科商業科選択授業において、「商品開発と流通」「ソフトウェア活用」「観光基礎」「デザイン基礎」「ビジネス会計」の授業内容の説明と、特別支援学校の生徒は興味関心のある科目を選択し、合同授業を行う提案があり、特別支援学校で検討した。特支は1年生のみの在籍で専門コースがまだ始まっていないことから、「翌年以降の実施の検討となった。



本事業
の成果

- ・ 特別支援学校が開校1年目であるため、生徒・教師が共に互いのことが全くわからない状況であったが、1年間の交流及び共同学習の取り組みにより、互いの実態を知ることができた。アンケートの結果から交流の機会が多い学年ほど併設に対する意識は高まっていることが伺える。
- ・ 生徒間の理解を深める交流的側面については、体育祭や文化祭といった学校行事は有効であった。
- ・ 互いの教育効果を高める共同学習については、各学校の授業だけでは気づけなかったことに視野を広げる機会として有効であった。

【生徒の意識調査の結果】

併設であることが「うれしい」「どちらかと言うとうれしい」という生徒の割合の変化(4月→12月)

	特支1年	商業1年	商業2年	商業3年
4月	76%	43%	30%	30%
12月	86%	54%	35%	40%

課題と
今後の
展望

【課題】

- ・ 合同で進める題材を設定するにあたり、必要な時間数を精査し、各校で計画的に教育課程における合同授業を設定する。
- ・ 両校の専門教科については、取り扱う題材を共有することで、互いの教育課程が関連しあうことができるようにする。
- ・ 取り扱う内容や題材の共有を目指し、両校の現行の教育課程の広がりや深まりが実現できるよう、カリキュラムマネージャーが中心となって、互いの専門教科の教育課程の重なりや関連を明らかにする。

【今後の展望】

- ・ 合同授業の実施を経て、生徒が学習内容を理解したり、技能を習得したりすることに要する時間に差があることが明らかになったため、同じ題材を使って共同学習を進めるにあたっては、効果的な活動のタイミングを見図って計画的に合同授業を設定する必要がある。
- ・ 特別支援学校における職業専門コースと商業高校における商業科といった専門性の高い教科については、それぞれの教育課程における目標が異なるため、同じ場所で合同で授業を行うことは、教育活動を充実させづらい面がある。
- ・ 両校の教員が互いの教育課程や授業の進め方についての知識が不足している現状がある。そのため、自校の教育課程に生かすことができる互いの専門性に気付いていない部分がある。